

第 72 回全国公立高等学校事務職員研究大会（兵庫大会）

特別分科会 参加報告

鹿屋工業高等学校 前田 淳
武岡台高等学校 福山 廣大

1 はじめに

本特別分科会は、全国から若い職員が一堂に会し、「若手職員の悩みや課題と解消に向けた取組、改善方策」や「学校事務職員として期待されるもの、これからの学校事務職員は、どうあるべきか」などのテーマについて、意見交換、討議し、コミュニケーション能力を高めるとともに全国の若手職員との情報共有する機会の提供をねらいとして実施され、全国からおよそ 100 人が参加した。

2 開催日程

1 日目 令和元年 7 月 24 日（水）

基調講演① 「経験の仕方を考える」

～今日は Team Fushimi のメンバーになってもらいます～

シンポジウム 「いま、私たち（若手職員）が引き継ぐべきもの」

～見て、聴いて、話して学ぶ 問題・課題への取り組み方～

基調講演② 「事務職員のやりがいを考える」

～北海道札幌伏見支援学校開校物語～

2 日目 令和元年 7 月 25 日（木）

ワールドカフェ方式によるグループ討議

「学校事務職員としての仕事の流儀」

～事務職員から事務職人となるために～

3 参加報告

(1) 1 日目

ア 基調講演①

講師に北海道札幌国際情報高等学校 事務長 岩崎英樹氏を迎え、OJT（On-the-Job Training = 職業教育）の考え方を基に、これまでの取り組みを紹介しながら、「実際に OJT を受ける者として、教える者の考えを理解してほしい」という立場で話をされた。

まず演題について、「Team Fushimi」とあるが、岩崎事務長の考えるチームとは文部科学省が提唱している「チームとしての学校」のことを指すのではなく、「チーム

＝事務室のこと」と仰っていた。若手職員をそのチームの一員として迎え入れ、そしてチームを出て行くときに「あなた自身が成長してほしい」というメッセージを込められていた。

岩崎事務長はチーム（事務室）の中の事務長の役割について、事務長と主任の大きな違いは「責任」と話されていた。その責任は大きく分けて2つあり、1つは「認知していないことについての責任」、もう1つは「行動責任」だとしていた。その中でも「行動責任」について、岩崎事務長は部下の育成こそが重要な行動責任とし、OJTの重要性を説かれていた。岩崎事務長自身のOJTの取り組みの1つとして、毎週金曜日にメールマガジンを事務室内で発行していることを紹介されていた。配布されたメールマガジンには日常の教員とのやり取りから発見した何気ないことやご自身のこと、働き方のスタンス、そしてどのような経験をしてどのような事務職員を目指してほしいのか等、非常に幅広い内容が記されており、若手職員にとってとても勉強になる内容だった。

演題「経験の仕方を考える」という言葉にあるように、岩崎事務長は若手職員にとって最も効率的な勉強は「経験すること」と仰っており、単に知識を教えたいのではなく、どのような経験を積ませるかが事務長として大事な仕事だとされていた。

より良い経験の積ませ方として、まず一つ目に「目標を立てる」ことの重要性が話されていた。若手職員に短期間で具体的な手段を用いた目標を自分で決定させ、その日できるようになったことや良かったことを毎日まとめさせる。それが達成経験へとつながり、継続への後押しとなる。しかし、なかなかそれが難しい職員もいるため、指導者が与えてあげることがチームとしての支援に繋がるということだった。二つ目に「楽しく働けば変わる」ということを仰っていた。若手職員にとって初めての仕事では不安を伴いがちだが、不安は興味・関心・創意工夫の低下に繋がり、仕事にとってマイナス面が多いため成長の邪魔となってしまう。また、一人で頑張らせてしまうとそれによって起こる不安やデメリットが大きすぎると警鐘を鳴らしていた。指導者は若手職員の不安をできるだけ感じさせないよう経験させることが重要であるが、一方通行で教えるのではなく、一緒にやることで若手職員の経験の機会を奪わないことが大切だと話されていた。

そして若手職員に対して、「学校事務職員」になるために、学校にいるからこそできることをしてほしいと結んでいた。



イ シンポジウム

シンポジストとして、岩崎事務長と山口県立長府高等学校 主任主事 大島和也氏が登壇し、参加者がグループ討議を行う形式で開催された。

大島主任主事は自身の経験に基づき、学習や成長は90%が仕事や指導によるものと話され、1年目から5年目、6年目から10年目、そして10年目以降と期間を分けて、自身の経験も踏まえて仕事についてどう思っていたか、どう取り組んできたか、そして若手職員に対しどう仕事に向き合っていけばいいかを仰っていた。

大島主任主事の経験に基づくモデルケース

1年目～5年目	6年目～10年目	11年目以降
頼まれた仕事はすぐにとりかかる (今日できることは今日)	何でもやってみる(上司に頼んでも)担当していない分掌をやってみる	学校教育目標、経営方針の実現を目指す
「報連相」特に報告を大事に	困難な仕事に挑戦	改善点を管理職に提案
責任感を持って一生懸命に	協会や生徒とのかかわり等プラスアルファを	学校全体を見渡し、問題を発見し解決する力
上司や先輩、同僚を信頼する	趣味の充実	渉外・交渉・連携する力
同期を大事にする		常に問題意識を持って取り組む

大島主任主事のモデルケース内の「報連相」について、岩崎事務長は事務長としての立場から、「報連相」をしたくなるような事務長かどうかによって左右されることも大きいので、できないからといって自分を責めないこと、と若手職員にメッセージを送っていた。

シンポジウム内では事務職員という職業についても意見交換がされ、その中でも事務職員という職業はシンクタンク研究でAIに代替可能な職業にリストインしており、AIではできないような独創性を身につけてほしいということ、また、職務怠慢や指示がなければ動けないような事務職員にはならないでほしいという岩崎先生と大島主任主事からの言葉が印象的だった。

ウ 基調講演②

基調講演②では再び岩崎事務長を講師に迎え、北海道札幌伏見支援学校の開設準備室での活動から、仲間と共に学校を1から作り上げていく中で「人に感謝する喜び」や「人の成長を見る喜び」を得て、そしてそれが「学校事務職員のやりがい」であると仰っていた。開校に伴い作り上げた校内規定「伏見のABC内規集」には学校への想いを込めたと話されており、私たちが勤務している学校も携わった多くの人たちの想いや願いが込められているのだと改めて実感した。

(2) 2日目

ワールドカフェ方式によるグループ討議

2日目は20組の班に分かれ、前日のシンポジウムで決定した「仕事の経験の仕方」と「事務職員のやりがい」という2つのテーマについて、各班で自由に意見を出し合い、相互理解を深めることを目的にグループ討議を行った。

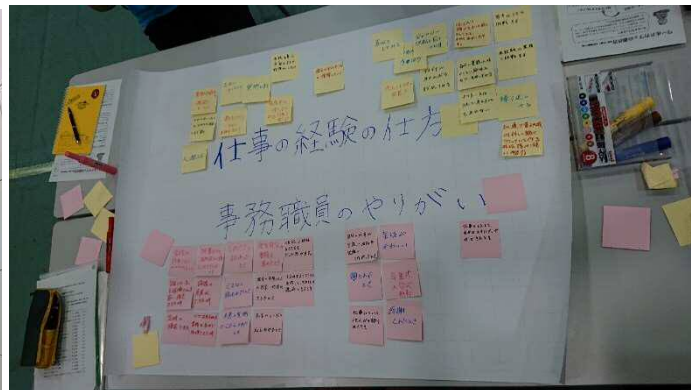
ワールドカフェとは、【カフェのようなリラックスした雰囲気の中で、参加者が1つのテーマについて自由に意見を出し合い、互いの考えや価値観を知り、相互理解を深めることを目的とする討議方法であり、結論を出す必要はない】とされている。

参加者は2つのテーマについて、付箋に自由に記入して方眼用紙へ貼り付けていき、ある程度出揃ったところで自信の経験や考えを踏まえて記入したことについてプレゼンテーションを行い、相互理解を深めていった。

筆者の参加した班で挙げられた意見の一部

仕事の経験の仕方	事務職員のやりがい (どのようなときにやりがいを感じるか)
<ul style="list-style-type: none">・ 真似をしてみる・ 悩んだり、調べるよりも前にやってみて、わからなかったら聞く・ 繰り返しやる・ 忙しいときに成長？・ 苦手なことに挑戦する・ アイデアが浮かんだらまずやってみる・ 業務時間外の雑談にヒントが…？	<ul style="list-style-type: none">・ 締切に間に合ったとき・ 頼られたとき・ 仕事を通して自身のスキルアップができたとき・ 相手の予想以上の結果・処理ができたとき・ 学校の行事ごとにかかわれること・ 定時に帰宅できた

最初のグループ討議後に2回席替えを行い、他の班の意見が貼られた方眼用紙を見てどのような意見があったのか参考にしたり、プレゼンテーションで他県の参加者から各県の事務室の現状や制度等を学習したりするなど活発な意見交換が行われ、熱気溢れるグループ討議となった。



4 おわりに

本分科会は全国協会初めての試みということで、参加させていただいたことをとても光栄に思う。自分たち若手職員がこれからの学校を支えてほしいという講師の先生の想いを強く感じたと共に、全国の若手職員が皆様々な悩みや葛藤を抱え、それでも学校のために頑張っている姿に勇気もらった。この分科会で学んだことや感じたことを日々の業務に活かしながら、諸先輩方のような事務職員を目指して日々精進していきたい。